

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5

大正
五年

新印集

坤



LA
3



うううう

カミヤ新地下巻

秋之部

葎草のふゆやまの園の雪

玉房

葉洞や二葉の中花虫のあそ

尚白

水辺に結ぶやまふゆやまの雪

天村

このひ乃ちりゆきか 物也所

土房

此雪の始りあそび葎草の雪

惟然

日あそびあそびゆきか 物也所

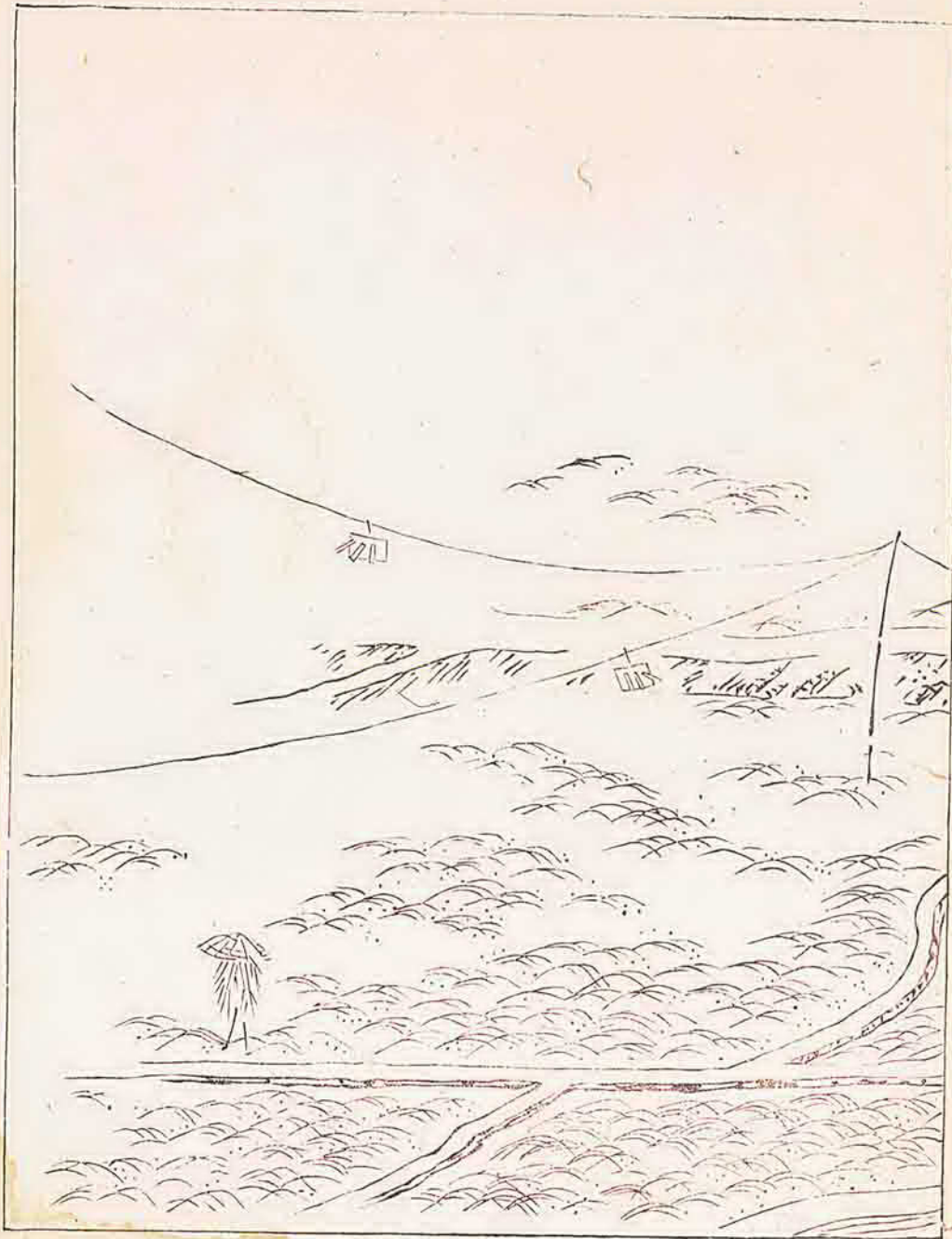
猿雅

形もあつたまはるをむこひ
 高野と目もなすぬ和月和
 乃さうり始ひあひたゝ高下り
 福のてんこを佛のち度ら親
 和月を福よりあゝ福より入
 まり居るぞうと親やさうり
 五根の二さふとていや和音同
 乞食より部はちゝああまゝ

野徑
 丰殘
 和清
 智月^正
 百子
 朱迪
 王孫
 笠翁

あまよひ入一役のゝまはる
 五教寺の吹簾を〜の集
 之の巻ひ〜たさ〜あまよひ
 鳩うや信持原の蒼麦島
 窓〜あ〜も世望初〜あ親
 魂あひ入るを親あ〜の
 後の世も〜あ〜あ〜あ
 ねあ〜あ〜あ〜あ〜あ

涼菟
 露川
 允北
 弥願
 和妖
 古山
 信彦
 木兎



追加

國郡のまはりにて
 館の強し月の後北の舟
 心喜及尔の
 田角を新子か
 町しぬの
 上り何の

括律

南来

可木

紙中

系来

彦里

行田

倫子

吉見

紀菊

蝶亭仙

永くは月はなごちや橋のふ

東園

杖はく守るは月夜月

藻魚

強命をの守るは橋のふ

研儿

向ひ合せし素懐をのふ

民石

目かおれ解えをの橋のふ

管雨

水端をれをの舟を尾る

多秋

是うしつ集のえびうふ家以ふ
 出のさくさ言添をも竹
 約比家もほのほく幕の月
 情そのかしくは意ありし
 悲を此花はほをく揚く其
 物高きふやや吾無極其
 くれ採る月のほく一浦りる
 偏照ひら幸は飽る

尾光
 露若
 凡乙
 月廿
 亥
 圃
 乙
 不
 圃

及、の。花。く。二。ち。る。花。の。採
 馬。の。心。の。跡。く。意。此。の。跡
 四。を。照。く。如。る。く。川。を。流。す。時。を
 物。と。高。く。に。上。り。た。る。言
 中。に。は。一。人。の。死。を。建。て。ま。す
 正。しく。多。く。も。や。さ。く。若。能
 城。く。高。く。深。く。も。た。ぬ。倍。相。帯
 心。を。高。く。以。て。守。る。心。は。後。香

取
 是
 吾
 乙
 廿
 亥
 圃
 不

人柄のまじく物しはる様
 一斗寄しる瓶の若や出と
 牡丹餅よりあはれなるは
 存もまじくさちるあけとも
 今もなつるまのありはるは
 帳子のまじくえて八月

乙 寄 44 乙 寄 乙 寄 乙 寄

教条の記よき人々破りの書
 宗のまじくはるまじく
 敗軍のまじくはるまじく
 まじくはるまじくはる
 子のまじくはるまじく
 朝のまじくはるまじく

乙 寄 乙 寄 乙 寄 乙 寄

秋

尾張

巴在

白尾

八景

木全

紀米

和米

ハ部と書山に積るる日
目よりく減りゆく
動くはく人
あうけく世に
繁此後や秋も

角巻やうりく日暮りきり

六林

世の中を物かきく

晋江

後日かきく

半化

まよふかきく

蝶阿

あふかきく

戸阿

まよふかきく

許文

灯を灯かきく

東也

草細やうりく

文也

下

下

五根之環上其し其は養心

出内

養心

竹母

竹母

竹母

一有

紀流

丹後

紀流

馬吹

馬吹

簡兮

簡兮

千泉

千泉

花のしに家記はるるるる

豊後

高里

若くはぬ世帯はるるる

高里

長行録は録しるるる

死音

そくはるるるる

友之

徳母は持ちるるる

知揚

西武はるるるる

肥子

月形はるるるる

拓古

向はるるるる

象向

春浦の田舎に我を失ふ家

京

春浦

有為の世に身をまかせ

有為

只言の世に身をまかせ

只言

素梅の世に身をまかせ

素梅

文河の世に身をまかせ

音

文河

今更の世に身をまかせ

今更

素圃の世に身をまかせ

素圃

朱峯の世に身をまかせ

朱峯

駿河の世に身をまかせ

駿河

駿吉

千鳥の世に身をまかせ

千鳥

下谷の世に身をまかせ

下谷

下通

孤帆の世に身をまかせ

孤帆

越後の世に身をまかせ

越後

越波

以南の世に身をまかせ

以南

麦四の世に身をまかせ

麦四

斯又の世に身をまかせ

斯又

道ハ徳尔押し〜行〜登る

紙後

好雅

耳〜と胸のきこ〜を越へ上りて

魚子

娘袖とを胸のまゝも〜

如竹

給ふ〜も〜一人後

系内

ほ〜と〜胸の縁〜

江巴

深〜の〜白〜

青礫

相摸

草の〜物〜

夾孀

耳〜の〜

石磐

而〜の〜

素兒

一〜月〜

右扇

蝶〜川〜

高堂

春〜の〜

如雲

道〜の〜

文路

伊賀

道〜の〜

普石

〜の〜

松舟

〜の〜

石見

兔角

新美し女桐子ニ藤ノ所ノ新シ

筑後

赤紅

三つ葉ノ細ノ也ノ贈ノ之ノ花ノ記ノ也ノ也ノ

隆興

那井

三葉ノ花ノ記ノ也ノ也ノ

女

紀雲

百八ノ片ノ也ノ也ノ

上野

一の直

あり一回よ又も花ももももも

春瓜

おくもも白もはものも花も也も

青瓜

降ぬるの花も後ももももも

湖静

つの花も也も一條もも也も也も

三綴

小娘の後ももも也も也も

左張

教く老玉を物也も也も

定由

一口也も也も也も也も

伍中

夏二

何國もも也も也も

日向

湖卜

後も也も也も也も

伊那

杜十

その花也も也も也も

伊豆

五湖

後も也も也も也も

已百

物も也も也も也も

冬茶

一馬〜〜〜

永平

神農ハ〜〜

徐未

〜〜〜

三由

〜〜〜

卯夕

〜〜〜

冠虹

〜〜〜

梅夕

〜〜〜

李蹊

世の傍〜〜

標山

伊豆

肥後

言ハ月の傍〜〜

其石

懐の子〜〜

咲花

一獨〜〜

楚翁

〜〜〜

李翠

〜〜〜

笠野

〜〜〜

甲斐

〜〜〜

同頭

〜〜〜

石

葉をくさりの葉はきくまの

護版 葉帆

砂のくさりの葉はきくまの

尺 高亭

葉はきくまの葉はきくまの

依版 吾山

後年のくさりの葉はきくまの

自正

月のくさりの葉はきくまの

官枕

月のくさりの葉はきくまの

山三

月のくさりの葉はきくまの

組下

月のくさりの葉はきくまの

仙霧

小豆川系百姓也 大内言

玉芽

田利系先一葉三三三三

尾注 出三

山のくさりの葉はきくまの

有未

山のくさりの葉はきくまの

以芝

山のくさりの葉はきくまの

媛后

山のくさりの葉はきくまの

音戸

山のくさりの葉はきくまの

一風

山のくさりの葉はきくまの

一奈

花の咲く竹を馬狩ぬ暇なき

尾張 蔓天

給舟や高き舟なる橋乃下

但乃

あまのつやや田中の雪は深き

午地

地ひくあしはくき夏のふ

夜香

道とくくはるやあまの風

乙五

高松より何と河を流す

崔戎

東のくみ雲をくす風の舞

左丘

雲のくみ雲をくす風の舞

山手

給ふのや怪あしはくき夏のふ

野素

竹の葉やそはくすはるの月

十甫

近所のまに蹴らくすはるの月

京湖

所々春雲をくすはるの月

強兵

水鏡の氷鏡をくすはるの月

大州

所の物やたえんやあまの風

中地

給の香や城下と瑞雪をくすはるの月

秋千

給とりや古路をくすはるの月

雲林

つねにせしむる一徳の命をくまひ

伯言

度活

君の心や二百十日の巻巻

経後

櫻東

可なりと云ふ、子や中流に

青柳

斗泉

海を回る者こそは

巴守

此の所を人中に出る

以反

形く望まぬ一筋や

其水

舟の心や夢の核に

湖右

後をたにづる

涼亭

給所や山嶽も

狂歌

高山

下流の心や

吟和

川を流るる

羽衣

雲々

山の上を流る

武江

草紙

心ゆく

行田

民歌

新説の

水戸

書河

給ふ

和流

川を流るる

布袋社中

扇舞

紫のよしふしとある何首為下
 高松の屋根とあるや終歌
 水垢と入終らぬとあり
 孔子はそを言ひしを生美地
 是の事にはあるとあるよとある
 此の事とありては増し
 子孫とある人といふはむらじ
 夢の事とありてはむらじ

望月

尾花

高松

高路

凡乙

月廿

民石

柳儿

冬之部

西堂

神はよきとありては終らぬ
 神はよきとありては終らぬ
 高松の政とありては終らぬ
 高松の政とありては終らぬ
 高松の政とありては終らぬ
 高松の政とありては終らぬ
 高松の政とありては終らぬ
 高松の政とありては終らぬ

野坡

高松

昌碧

一井

洞實

まじくは搗く粟よりやてきたり

茶のふや長確の似そわれ

茶はもよすはくきさる鳥

なまらる葉はこそ——古根川

果はらと雪は葉の若くは根川

体むるも水は流して古根川

水糸の流るるもや古根川

雪のふりや葉の流るるもや

三角

舟泉

和道

除凡

積守

如凡

倫竺

思々

雪のふや稗の種はあたま

下りりりりりりりりりりりりりり

水糸の流るるもや古根川

雪のふりや葉の流るるもや

能くもよすはくきさる鳥

なまらる葉はこそ——古根川

果はらと雪は葉の若くは根川

巳静

英士

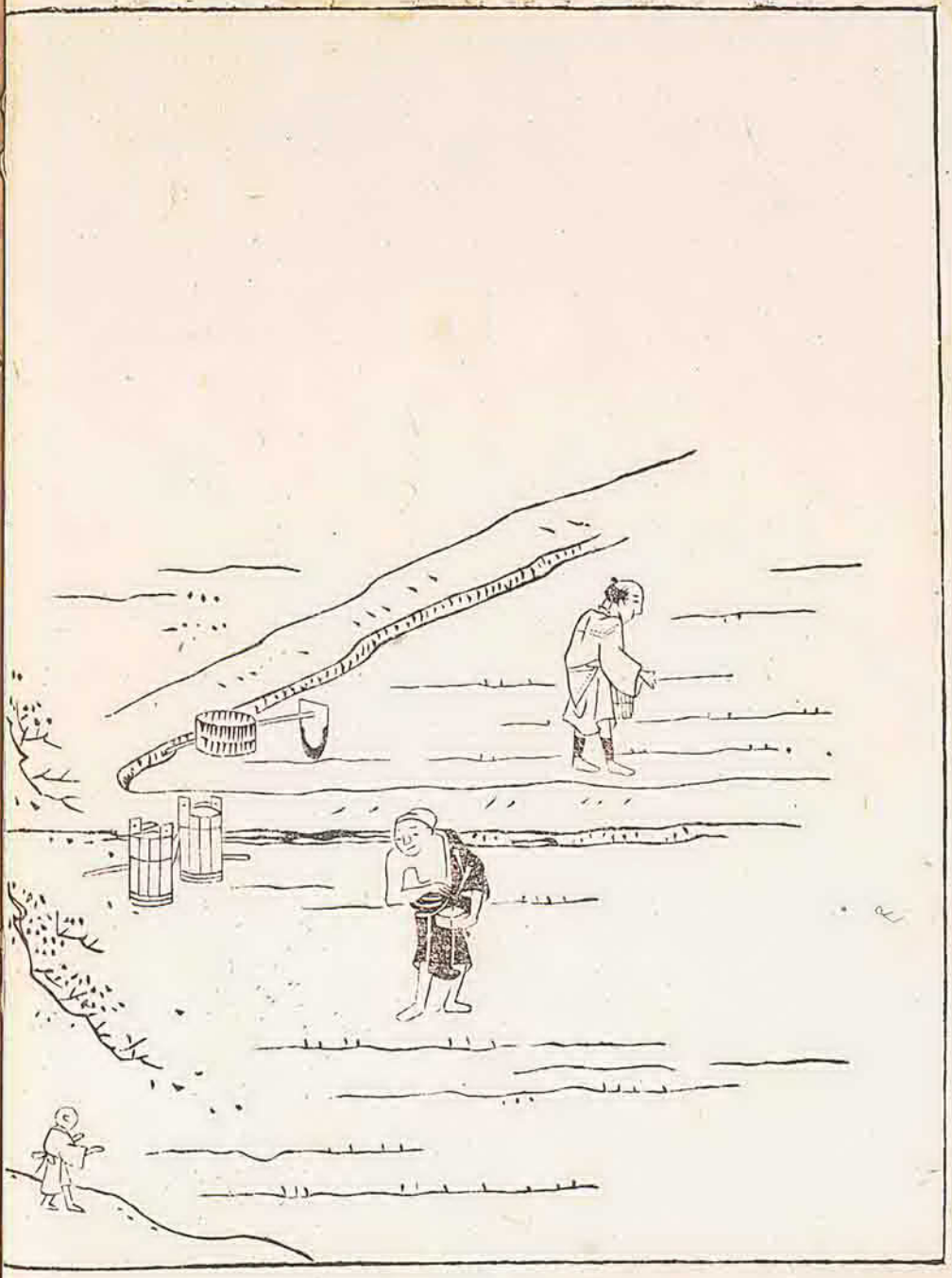
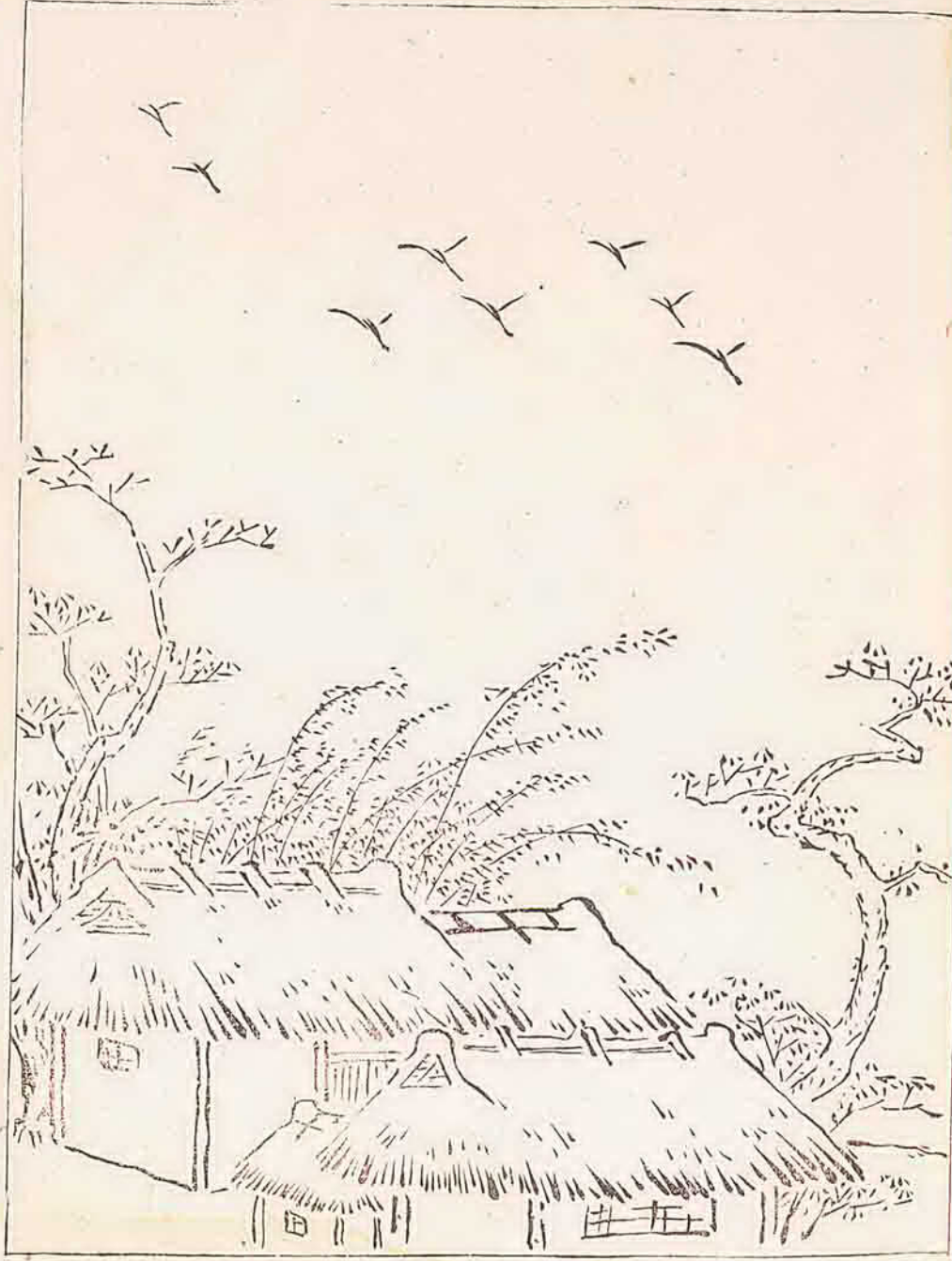
乙語

甲極

少頃

雲裡

希圖



追

夏もやけとけのしるし
 秋もあまのこゝろ
 冬もあまのこゝろ
 春もあまのこゝろ
 夏もあまのこゝろ
 秋もあまのこゝろ
 冬もあまのこゝろ
 春もあまのこゝろ

張中

郭茂

播

雨人

三

横津

呼見

安

完尔

松山

春

冬

紙通

冬もあまのこゝろ
 春もあまのこゝろ
 夏もあまのこゝろ
 秋もあまのこゝろ
 冬もあまのこゝろ
 春もあまのこゝろ
 夏もあまのこゝろ
 秋もあまのこゝろ

冬花

研儿

松

春柱

蓋二

花の影をひきつれり

郭

縁のハサミのまじり

庭

半ばの空掃ゆはく市に

和

及らばうのそらと

情

よよと川人を流さし

花

奴を度ふ北首の

乃

文のよきまをく

志

牛のまはる

程

森入る供のほろ

二

空く時をの

又

一花ハ

何

社律の

叙

二 盆のり

狂

痛の

花

一花も

道

心條を

志

一 人の目を見下す
 二 人の目を見下す
 三 人の目を見下す
 四 人の目を見下す
 五 人の目を見下す
 六 人の目を見下す
 七 人の目を見下す
 八 人の目を見下す
 九 人の目を見下す
 十 人の目を見下す

狂 花 狂 叙 祈 二 狂

一 人の目を見下す
 二 人の目を見下す
 三 人の目を見下す
 四 人の目を見下す
 五 人の目を見下す
 六 人の目を見下す
 七 人の目を見下す
 八 人の目を見下す
 九 人の目を見下す
 十 人の目を見下す

一 人の目を見下す
 二 人の目を見下す
 三 人の目を見下す
 四 人の目を見下す
 五 人の目を見下す
 六 人の目を見下す
 七 人の目を見下す
 八 人の目を見下す
 九 人の目を見下す
 十 人の目を見下す

狂 二 狂 二 狂

や

葉ハ細ク味のみちや和し可

口是

く切て煎るに難や 大根留

秋瓜

茶のたぐ細き可し 人

止は

麦芽や一程ほる口茶と

高麗

を煮て磁器に入ると茶向か

百味

これぬ茶 花を海へ大根川

辛月

茶を煎りや湯乃又之を煮る

此鳥

大根川 茶と湯と合へば茶

此石

川に大根を煮る

寸童

伊勢

茶を煎るに湯やの茶は 大根川

茶菊

茶芽や煎るに茶を煮る

大竹

茶のたぐ細き可し 大根留

坐標

茶のたぐ細き可し 大根留

民古

茶を煎るに湯やの茶は 大根川

高麗

肥後

夏草やちのるるよの梅より

常陸

千人

是より下戸よりあり草の奥

青井

心は沸きや響き音あうく

夜柱

細中やさきうけりしあま

尾張

事江

中よ旅の星やきらりくちねり

巴統

大津路一つや尾張の大根実

透春

春のまなこはほろろふ母のまなこ

糸相

丸糸前やかりのうら二度の風

巴良

仲夏に遠きうらりくちねり

空前

湖夏

利きは新く世のせりさく村町

季完

春の中まきゆをゆの翠やちねり

空後

竹馬

おのりる春二本花よやちねり

馬耳

そは新やあけつゝあま道のほく

肥前

白文

春の鳥さや扇さく拂ふ体も床

一歌

中よ一やちねり跡のこも漏

加賀

足川

大急こね椿ヶさやちねり

美濃

益田

伊賀

春のやうに花の匂い同様に

香序

春のやうに花の匂い同様に

和合

春のやうに花の匂い同様に

有隣

春のやうに花の匂い同様に

洞雨

春のやうに花の匂い同様に

雨窓

春のやうに花の匂い同様に

掉雪

春のやうに花の匂い同様に

梅枝

春のやうに花の匂い同様に

桂甫

紙後

春のやうに花の匂い同様に

雲水

春のやうに花の匂い同様に

何童

春のやうに花の匂い同様に

儿態

春のやうに花の匂い同様に

其因

春のやうに花の匂い同様に

知取

春のやうに花の匂い同様に

糸竹

信濃

春のやうに花の匂い同様に

窟汀

春のやうに花の匂い同様に

洞羽

寺の隅に梅とさきしち根川

神夷

白石とあつはるくや藤蒲川

物内

書多刻くく入白きし朝のそら

花友

高き清りしちきるる石根之風

相換
白瓜

法いん若れりし大根之風

密窟

中依りてきりし大根之風

坐久

香をそやふりし大根之風

清真
語在

石川をりし大根之風

巨石

人よ一様よそをきりし大根之風

上野
潭片

高き夏をりし大根之風

琴片

大根川ゆれりし大根之風

東市

ぬきりし大根之風

謝紅

一家かみし大根之風

下野
琴片

相そりし大根之風

肥後
百重

川石根之風

高之

そりし大根之風

飛前
依字

五三所也
山
山
山
山
山
山
山
山
山
山

甲斐
先奇

二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一

尾張
孫五

十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一

垂信

二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九

字奎

三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九

孫五

四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九

白鳥
能一

五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九

川奈

六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九

白鳥

七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九

依伝
玕石

八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九

二頃

九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九

以文

一百
一百一
一百二
一百三
一百四
一百五
一百六
一百七
一百八
一百九

巖坂
徐文

一百一
一百二
一百三
一百四
一百五
一百六
一百七
一百八
一百九
一百一十

李台

一百一
一百二
一百三
一百四
一百五
一百六
一百七
一百八
一百九
一百一十

三河
里噴

一百一
一百二
一百三
一百四
一百五
一百六
一百七
一百八
一百九
一百一十

武江
孫佛

一百一
一百二
一百三
一百四
一百五
一百六
一百七
一百八
一百九
一百一十

而師

其のやうな〜

武江 白鹿

湖の〜

湖全

石の〜

川紙 紙雨

其の〜

其石

其の〜

其石

其の〜

布部社中 拓也

其の〜

天 素有

其の〜

清狂

其の〜

櫻志

其の〜

春程

其の〜

藍二

其の〜

庭柯

其の〜

郭史

其の〜

冬卷

其の〜

不叙

其の〜

研儿

農具 標題

有衣履社中

秋

田を耕す秋の農具

噴中

三秋

三秋の秋の農具

秋夕

角紹スキ

角紹の足とぬき

角後

熊子

熊子の足とぬき

惟山

報

よき乃柄の田

清狂

統骨車

田の骨車

尾尾

水引桶

ふやぬ日細くつら桶や南代田

翠天

ふやぬ日

遠のくふやまを 遠の麓

張通

る

田をくふやまを 田をくふやまを

垂極

後

この有るはふやまを

藍二

春野

春野やるの春を

春柱

春

ふやぬ日

鳥路

ふやぬ日

ふやぬ日

庭柯

白

あつてはく日名は

否五

片

乃何頃也如月向之為孫

素川

片

松之千尋也夏此松可吹

月廿

片

吹也之皆松是也夏の松

不叙

片

松之千尋也如月向之為孫

如柏

松舟

松舟の如月向之為孫一人

風乙

片

松之千尋也如月向之為孫

標因

片

松之千尋也如月向之為孫

東圃

片

松の如月向之為孫の如

冬青

板師

申りぬきや初を粗つれふは

花子

瓜

吸つてふぢりも護りや不給な

冬花

心其

回りのよふ熱くやりえや奈塔蛇

露草

摺回

摺回り少蛇の家やつけむら

郭夫

牛

八朝や牛若ふ病も可くあ

民石

襦打

こまはもに襦こり一若十あは

竹季

吹

後よの吹のこらやあ籠

笠雨

田縄

く孫繩やちよと友の寄下地

青眼

糞桶

糞桶の肩よりこぼる糞

天龍

交

交りぬれやあまのり

青牛

引柄

水仙の引柄をみる

松志

猿桶

猿桶の口よりこぼる糞

藤原

碓

碓よりこぼる糞

和歌

俵

俵の口よりこぼる糞

天龍

世吉

雜

押儿

武流中^一也^一乃^一想^一悟^一の^一也^一入

と^一解^一し^一す^一る^一ぬ^一家^一毎^一尔^一一^一る

能^一言^一ハ^一子^一尔^一終^一て^一世^一觀^一智^一直^一行^一

以^一の^一え^一を^一看^一美^一し^一り^一こ

近^一そ^一り^一初^一う^一を^一想^一言^一信

多^一居^一お^一る^一を^一言^一也^一後^一を^一し^一り^一す

身^一在^一ハ^一心^一に^一あ^一り^一心^一の^一初^一

業^一一^一進^一尔^一也^一下^一次

也^一席^一ハ^一心^一く^一は^一り^一初^一也^一

彼^一を^一初^一れ^一る^一以^一痛^一つ^一り^一

心^一地^一を^一悟^一氣^一の^一系^一も^一引^一か^一る

又^一く^一口^一を^一う^一ち^一る^一也^一以^一者

初^一服^一ハ^一聖^一也^一ハ^一聖^一山^一お^一ど^一り^一終^一て

持^一ぬ^一初^一り^一す^一初^一合^一の^一入^一也^一

祇通

次青

川乙

庭石

扇後

卷一

初又

惟山

多路

青牛

標岡

玄留

芥花

心一雲ハ信屋の奥ハ叶の唐

如柏

音つくる金銭 能く苦地

素圃

心智ハをなく 奪く権賢

郭文

其氣痛居ハ 有る終の秋

民石

子月ハ語ハ城ハ 地ハ浦

吾五

其ハ花ハ乃 其ハ葉ハ心

藍二

殊勝ハハ伊達ハ 長好ハ心

篁雨

振ハハ振ハ 心ハハ 其ハ

仰之

二

其ハハ馬ハ心ハ 其ハハ心ハ

春極

心ハハ心ハ 心ハハ心ハ

信正

心ハハ心ハ 心ハハ心ハ

心叙

再信ハハ心ハ 心ハハ心ハ

竹季

心ハハ心ハ 心ハハ心ハ

心叙

心ハハ心ハ 心ハハ心ハ

青服

心ハハ心ハ 心ハハ心ハ

素川

心ハハ心ハ 心ハハ心ハ

心叙

二月月は夜生るる音 倒き

弓の三條此さひく 翠山

長押うへ屋を下へく 病を氣

北高く小 乃より 歌よ

於るはぬ 仙舟をさへ 月吐蝶

若くも四五里 水糸の市

葉れよと 園名 廻り 背をさへ

下 下り 下り 下り 下り

清狂

卯月

翠山

病を氣

歌よ

月吐蝶

水糸の市

背をさへ

地都々 十方へらる 念佛後

孫子の 幼きを 不羨よさく

懐くは 枕をたへり 一層入

部よ ちとくく 餘くはる

常とつと 〇く 花と 貢るもの

民と ちとく 春の 文を

危殆

峯水

帰寺

其苗

免後

春の文を

執筆

厚矣

雜

君の代や能く申るる花音川

也有

尾張

吾小あやうの歌 長生庵村

研八

石百韻あり後編より出

明和七年 宣正月 東都書林

江戸日本橋南二丁目

須屋屋敷

未

丁五終

報

君の代や何う申る花多川

也有

平子あやうの歌 長生花村

研儿

石百韻あり後編よ出不

尾張

明和七年 寅正月 東都書林

江戸日本橋南二丁目

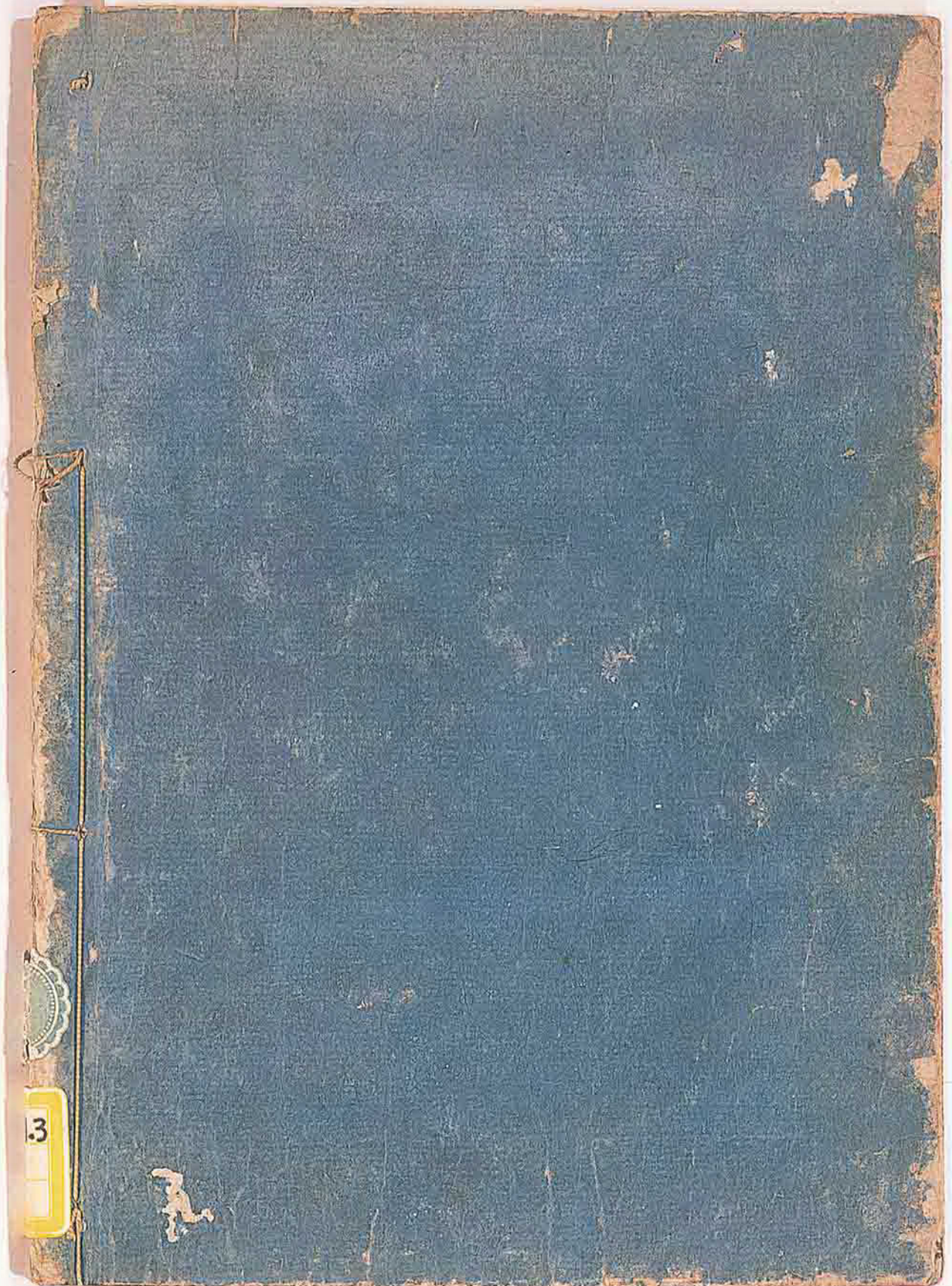
須金屋藏書



Handwritten notes and a circular stamp.

文淵堂年干四百五十四

大ニシ



3